

日本記者クラブ会報

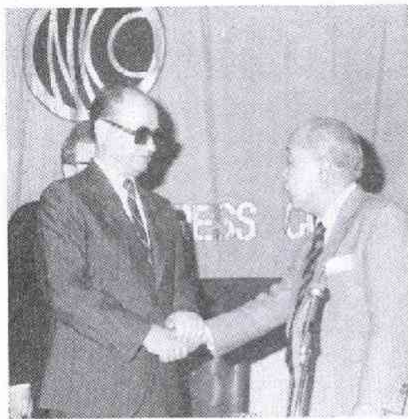
第209号
1987年
7月10日発行

東京都千代田区幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 110
社団法人 日本記者クラブ
電話五〇三一二七三二(代)

新陣容で委員会スタート

「日米関係」シリーズ相次ぎ開催

五月の通常総会で正副理事長、理事・監事および各委員会の委員長が選任され、ついで各委員長によって委員の委嘱が行われたあと、六月の上旬から中旬にかけて順次、理事・監事の初顔合わせや、会員資格、企画、会報、施設運営など各委員会の



ヤルゼルスキ議長と新井理事長(右) (6.30)

初会合が開かれた。

正副理事長をはじめ理事・監事、委員長については、前号で紹介したが、各委員会の委員の顔ぶれは本号三ページをご覧いただきたい。これらの方々は今後二年間、ご多忙のなかをクラブのためにご尽力くださるわけで、補佐する事務局一同も新たな気持ちで仕事に取りかかっている。会員諸兄姉の変わらぬご支援をお願いする。

江尻元理事に記念品

六月十八日の理事・監事初顔合わせでは、新井理事長から多年にわたるクラブの発展に寄与された江尻進会員に記念品を贈呈したいとの報告

があり、了承された。江尻会員はクラブ創立以来十四年間にわたり理事をつとめられ、また初代の会員資格委員長をお引き受けいただいたが、このほど新聞協会顧問を退任され、基本会員から個人会員に移られた。

会員資格委員会の初会合では、入会審査をクラブの目的と基準に照らして行うことが再確認された。これまでも何回か会報などでお願いしたように、推薦者になられる基本会員はくれぐれも慎重にお願いしたい。また企画委員会の初会合では、新任の細谷委員長から「クラブの権威を高め、親ぼくの実をあげるため、タイミングを見はからって好企画を打ち出していきたい」との挨拶があったのち、早くも幾つかのアイデアが出された。ご期待を乞う。

「東京港見学会」を二回実施

さて、クラブ活動についてだが、五月末の田村通産相の昼食会からス

スタートした「日米関係」シリーズは六月になってリード・シテイコープ会長、バックカード・ライシャワーセンター所長、加藤農水相、近藤経企庁長官、神谷全銀協会長、さらに七月に入って大前研一氏と続いた。

勉強もいいがほどに、という声が上がりがそうだが、口をかけた人たちから一斉にOKが来て日取りの調整がつかなかったのが実状、ご容赦願いたい。

このほか、六月の催しとしては、ヤルゼルスキ・ポーランド国家評議会議長を迎えての昼食会、東京港の見学、ワインの試飲会などがあつた。東京港の見学は希望者が多く、二回に分けて実施した。

また、水野教授の「ソ連の文化状況」とバックカード所長の「日米貿易摩擦」を会報記録版に収録した。

終わりになったが、元事務局長の藤本有典さんが六月二十二日に亡くなられた。療養中もクラブのことをなにかと気にかけておられた。ご冥福を祈る。

(事務局長 下田進一)

藤本有典元事務局長（ふじもと・ありつね氏）日本記者クラブ元事務局長（長）六月二十二日（月）午前四時四十七分、心不全のため東京・港区の虎の門病院で死去。七十二歳。

同氏は山口県出身、東大独文科卒。同盟通信社を経て昭和二十三年時事通信入社。整理部長、ボン特派員、政治部長、取締役第一編集局長、取締役事業本部長、監査役などを歴任。四十九年六月日本記者クラブ事務局長に就任する。渡辺誠毅理事長のもとで、帝国ホテル東館からプレスセンターへの移転を完了し、現行のクラブ運営の基本と会員制度を定め、ナショナル・プレスクラブとしての活動の骨格を定着、発展させた。五十四年十二月退任。

告別式は、六月二十三日（火）横浜市港北区の富士記念館で行われた。



藤本有典氏が亡くなった。大正ロマンの男が、また一人消えた。寂寞の情、一入である。

有典さんとの出会いは古い。敗戦で同盟が解散し、共同と時事に分かれて再生した。旧同盟の有典さんが、時事の政治部に入ってきた時だから、ほぼ四十年も昔になる。長身瘦躯、ダンディーな美男子で、金の指環が光っていた。

合理主義者で、自我が強く、冷たい印象を与えるほどだったから、仕事は、てきぱきと能率よくこなして、吉田から岸まで四代内閣の政治をフォローした。政治部長から、整理部長、そしてボン特派員、帰ったら写真部長と手荒い扱いを受けたが、彼なりに割り切って、それぞれのポストで全力投球を続けた。

反面、淋しがり屋で、子供がなかったせいでもあろう。奥さんと二人で、模様の汽車を走らせたり、拳銃の早射ちごっこをしたり、ボーリングにでかけたりしていた。晩年はこれに麻雀が加わった。

昭和四十六年に時事は労使紛争で

崩壊の危機に陥った。彼は事態收拾の中核となって働き、再建をなした。彼の感情に倚らぬ、冷厳な対処の賜物だった。

時事の役員を定年で退いたあと、直ちに記者クラブ事務局長に招かれ、プレスセンターへの移転、事業計画の策定、実施と、運営を軌道に乗せると、自ら事務局長の定年制を設け、時来るや、さっさと辞めた。

五年前、彼は胃ガンの手術をし

有典、死す

佐藤 達郎

た。やつれはしたが、回復は順調で、車を運転し、麻雀も楽しめるほどになった。

三年前、小生が、ガンで入院中、彼は屢々見舞ってくれた。そして「いまにガンの特效薬ができる、それまでは絶対に死ぬなよ、オレもそれで頑張ってきた」と励ましてくれた。今にして思えば、口先だけでなく、彼自身、そう信じていたらしい。楽天家でもあったわけだが、も

うひとつひっくり返せば、なるようになる。ケ・セラ・セラ。フアーズにも通じるし、デカダン——大正ロマン……でもあった。

七、八年前、彼はさるクラブの女性を可愛がっていた。奥さんを亡くしてだいぶ経っていたし、寂しさもついていた。顔形、声まで亡妻そっくりのひとだった。

「色恋じゃあないよ」と彼は言うし、彼女の素振りにも、そんな甘ったるいものは感じられなかった。「それじゃあ、なおバカバカしいよ、いいかげんにしとけよ」と言ったら、「相手がどう考えていようと、オレの方が好きならそれでいいんだ」と笑っていた。また、生前、「評価は他人の下すもの、本人が関知するところに非ず」というのも口ぐせだった。

結局、有典さんは、やりたいように考え、やりたいように生き、いい人生だったと呟きながら、愛する妻の許に旅立っていったのである。穏やかな死顔だった。合掌。

※佐藤氏は元時事通信社長で、現在、顧問。お二人は互いに「タッチャちゃん、ニーテン」と呼び合う仲でした。

第八期(昭和62・63年度)委員会 (◎印委員長)

総務委員会

◎渡辺 翼 毎日新聞社代表取締役専務取締役・主筆

渡辺 恒雄 読売新聞社取締役副社長主筆、経理・調査研究担当

細谷 洋一 サンケイ新聞社常務取締役編集・正論・工程管理室・校閲センター担当

犬養 康彦 共同通信社専務理事・編集主幹

吉原 好明 西日本新聞社東京支社長

鳥 桂次 日本放送協会専務理事

志甫 溥 東京放送テレビ本部報道局長兼解説室長

山田 年栄 日本新聞協会専務理事・事務局局長

泉 長人 日本民間放送連盟専務理事

新井 明 理事長

中江 利忠 副理事長

◎渡辺 恒雄 読売新聞社取締役副社長主筆、経理・調査研究担当

松下 宗之 朝日新聞社編集局次長兼電波報道部長

会員資格委員会

小池 唯夫 毎日新聞社論説委員長

播谷 実 読売新聞社論説委員長

樋口 剛 日本経済新聞社編集局次長兼日経産業新聞編集長

林 雄一郎 共同通信社編集局次長

玉井 賢二 日本放送協会報道局次長

青木 徹郎 東京放送報道局次長兼政経部長

亀垣 幸男 フジテレビジョン報道センター室長

壱呂 義道 日本新聞協会事務局次長兼国際部長

長竹 成吾 日本民間放送連盟事務局局長

企画委員会

◎細谷 洋一 サンケイ新聞社常務取締役編集・正論・工程管理室・校閲センター担当

浅井 泰範 朝日新聞社編集局次長

佐野 真 毎日新聞社外信部長

阿部 義正 読売新聞社編集局次長

山岸 一平 日本経済新聞社編集局次長兼政治部長

友田 錫 サンケイ新聞社論説委員

井上 好道 共同通信社論説委員長

佐藤 睦 時事通信社整理部長兼解説委員

石丸 和人 山形新聞社論説委員

高野 洋 日本放送協会報道局専門委員

高橋 祥起 日本放送協会解説委員

久木 保 東京放送報道局次長兼外信部長

藤川 魏也 日本テレビ放送網取締役報道局長

高阪 民郎 フジテレビジョン報道センター政経部長

武藤 懋 全国朝日放送報道局解説委員

鈴木 幸夫 テレビ東京常務取締役解説委員

浅野 修 日本新聞協会事務局次長兼編集部長

河野 昌之 日本民間放送連盟広報部長

林 卓男 個人会員

平田 真巳 個人会員

堤 佳辰 個人会員

有馬真喜子 個人会員

G・ヒルンジャー 個人会員

会報委員会

◎深川 誠 テレビ東京取締役編成局長

林 利隆 日本新聞協会編集部広報担当主幹

三好 崇一 個人会員

松井 章 個人会員

東郷 茂彦 個人会員

施設運営委員会

◎犬養 康彦 共同通信社専務理事・編集主幹

後藤 基 毎日新聞社論説副委員長

佐川 嘉秀 日本経済新聞社総務局長

根津 武夫 日本放送協会報道局次長

和田 千年 日本テレビ放送網報道局次長

小松原久夫 日本新聞協会総務部長

宮地 進吾 日本プレスセンター常勤監査役

甲斐原文夫 個人会員

野田 皓一 個人会員

総務委員会は、クラブ財政などクラブ運営の基本に関する案件を協議します。会員資格委員会は、基本会員から推薦のあった入会希望者の資格審査ならびに法人社内の会員変更・区分変更などを検討し、理事会に答申します。企画委員会は、行事企画、クラブゲストの選考などにあたり、会報委員会は、毎月10日に発行するクラブ会報の編集方針を決めます。施設運営委員会は、クラブ施設の管理、運営ならびにサービスの向上、改善策などを検討します。

とっておきの話

東大紛争と入試中止



黒羽亮一

長いこと社会部にいたが、事件記者落第で教育記者になったような者だから、この欄にふさわしい暗れがましい話はない。ただ教育問題では書くタイミングを間違えると、まとまる話もぶちこわしてしまふことが往々ある。したがって、記者の判断で、こわした方がよさそうなことは書くし、そうでなければ、かなり長期間伏せておかげをでないということになるか。その一つとして、もう二十年近く前になった東大入試中止の話でも書いてみよう。

中止か実施かで揺れる

昭和四十三年春の医学部紛争に始まって、東大の全学紛争、全国の大学紛争と拡大していったわけ

だが、同年秋になると翌年の東大入試ができるのかどうか注目された。そして東大側が聞かれるままに「何としても入試はやりたい」と言うと、文部省は「入試については政府と協議してほしい」とクギを刺した。大学内の教育、研究については自由、自主、自律が保証されているが、入試は高校教育などに関係が深い。つまり社会と大学の接点であり、それについては行政の意向もはたらき得るといふのが、当時も今も変わらない解釈である。

年末になっても東大は全共闘による全学封鎖状態が続いているので、十二月二十九日に坂田道太文相と加藤一郎東大長代行が協議して、入試は中止と決定した。ただ、この時東大側は「一月十五日

までに大部分の学部でストが解除され、封鎖解除、授業再開の見通しを得たら入試をしたいから、その際に文部省と協議の余地を残してほしい」とし、文部省は「余地は残すが、他の国立大学への東大の定員振り分け依頼などの仕事は始める」として、越年した。

年が明けると、東大の動きはあわただしくなった。九日には全共闘と日共系の乱闘が起こり、その鎮圧のためとして半年ぶりに警官導入に踏み切った。十日には秩父宮ラグビー場で、事実上の大衆団交である七学部集會が開かれて、学生側に譲歩した十項目の確認書が取りかわされた。十一日から十四日にかけて、医、文両学部以外ではストが解除された。この段階で加藤代行は入試実施を決意し、紛争の象徴である安田講堂封鎖状態を解消するため、警視庁との協議に入った。坂田文相も「加藤君は成城高校の後輩だが、なかなかよくやっているね」と言い、世論

も、開学以来学生を募集しなかった年のない東大の入試が、まさか中止されることはあり得ないという先入感が手伝って、入試実施に大きく傾いた。

「既定方針」とは書けず

しかし、入試実施を唯一の目標として形式的に正常化しても真の紛争解決にはならないし、東大は何がしかの社会的制裁を受けなければならぬのではないか。学内教員にも中止の方がスジが通るといふ意見がかなり多いことなど、私にはどうも釈然としないものがあった。

当時編集委員という身分で、ニュースの取材は要求されなかったのだが、あちこち回っているうちに、ある人から「君の言うとおりに、入試は中止にきままっているが、今それを言うとおちこわしになるから文相はとほけています。一方、安田講堂は対外的にもあのままでは放っておけない」といった話を聞いた。

こういう重要な情報は聞かない方が気が楽である。社内でもうかつに話せない。結局、安田講堂攻めの十八日夕刊に、「おそすぎた実

力排除」という解説を書いて、中止もあり得ることをほめかけた程度だった。二十日夜中止決定、その日組みの朝刊には、「既定方針だった」と書きたかったが、書

けば限られたニュースソースが、知る人にはわかりそうな気がして、これも見合わせ、私個人の判断で最善の選択をしたように書いた。このため国、私立の進学名門

高校や予備校などから、しばらくは分り分りされた。

ニュースソースの件だが、どうもこの方針を確実に知っていたのは文部省の担当局、課長、官房長、次官、大臣、それに当時の保利茂官房長官、田中角栄幹事長、佐藤首相ぐらいかと推量している。もともと東大側の要人にも伝えられていた形跡もある。そうなると、安田講堂落城の十九日夜「政府に入試要求、入れられなければ重大決意」と記者会見で述べた加藤学

長代行は大芝居をしていたのか、要人限りで情報が止まっていたのか。

ともかく警察幹部には知らされていなかった。二十日夕刻まで、警視庁や警察庁の首脳は、「文部省の力では東大紛争を解決できなかった。警察力で封鎖を解除して、

これで晴れて入試ができる。東大も受験生も満足だろう」と晴ればれとした調子だったが、その直後中止と聞いて恥をかいていたと、警察の記者から聞いた。

当時の文部省大学学術局長は東大出身ではなかった。また当時の警察幹部の一人は私のよく知っている人だが、のちに「あれは大学局長が積年の東大にくしの感情を發揮した措置だった」と私に残念そうに話していた。しかし、政府の入試中止方針は、そんな次元で決まったのではないと思う。ことは極秘に進められ、自民党文教部会も関与していなかった。全共闘にも民青にも最もきびしく、私学出身者が多い文教部会は、年末までは入試中止論だった。ところが

一月中旬には安田講堂封鎖解除、七学部との確認書破棄を条件に実施論に変わっていた。

したがって二十一日以降、「顔をつぶされた」というわけか、確認書問題で東大いじめをするようにしつこく文部省に迫り、同省もそうせざるを得なかった。

「物心の荒廃」談話

二十日夜の入試中止は、「東大側の実施要求で、年末の協議を再開したが、政府は依然反対で、協議は整わないので、年末決定が生きている」という文部省と東大の共同コミュニケーション形をとった。共同コミュニケーションだが、実質は東大が文部省に屈したことと、坂田文相談話が「物心の荒廃」と言っているところに意味がある。ゲバルトや封鎖は物的な荒廃だけではない。学生と教職員の心の荒廃の所産で、封鎖解除、スト中止と形式だけ整えばそれでよいというものではない。当時、こんな気持ちに同調して仕事をしていたわけ

だが、もう一点入試中止にそう驚かなかったのは、私が終戦直後の学生で、学制改革の運や不便に自分も友人も見舞われたが、それから二十年も経てみれば、それは人生にとってたいしたことでない、という実感を持っていたからである。

今でもその気持ちは変わらない。共通一次があろうがなからうが、また、△△大がA班だろうがB班だろうが、ニュースには違くないが、最近の新聞が、こと細かく報道するような大ごとではないと思っている。しかし、二十年近く前でも入試中止はこのように大変だったのだから、なおいっそう社会が落ち着いた今では入試改革はより大変なのであろう。

くろはりよういち氏略歴 昭和三年東京都出身。東大西洋史学科卒。二十七年日本経済新聞入社。社会部、編集委員、社会部長、論説委員を歴て六十一年退社。現在、筑波大学教授、臨教審専門委員。

コメを追う

しかし、コメ問題の追跡が仕事の大半を占めることは、いまでも昔も変わらない。

ある農水官僚は米価は「筋書きのないドラマだ」と言う。農協、自民党、大蔵省、農水省が、それぞれ立場から激しくぶつかり合う。当事者さえ、結果を予測するのは難しい。昨年の米価据え置き決定が好い例だ。その面白さは、一歩足を踏み入れて初めてわかる。し

ワーキングプレス

米価審議会は七月初め。この会報が、読者諸兄の手に届くころには、きつと「三十一年ぶりの生産者米価引き下げ」も決まっているはず。「今年はマスコミの書く通りに決めるよ」——自民党農林族の大幹部は、半ば冗談めかして語っていたが、はたして結果はどうだろう。

農政記者の仕事はコメ取材。農業、林業、水産業いづれも厳しい再編期を迎え、農水省詰めの記者は年中、次から次へと訪れるニュース取材に追われる。とてもかかつて言われたように「米価以外は遊んで暮らす」というわけにはいかない。

米価取材は連携プレー

榎原弘志

素を逆に操作するのが実態だ。そこで、米審への米価諮問前や答申後の政府・自民党政治折衝になると、官邸、平河（自民党）、財研（大蔵省）の担当記者の協力を求め、多角的に情報を集める。大詰めになればなるほど、農水省幹部の口は固くなるので、最後になると、こちらは他のクラブから入る情報を総合的に分析して、記事を書く。

かし、それだけに取材する側も、うっかりすると、興奮の渦中に巻き込まれ、方向を見失ってしまいう危険もある。

政府は生産費・所得補償方式という算定の手順に沿って米価を試算するが、これが百%尊重されることはまずありえない。関係者の水面下のかげひきで、値ごろ感ができあがったなら、あとはそれを合理的に説明できるよう、算定要

とこだった。日頃、コメ議員と接触して、党内情勢を把握したつもりになっていても、やはり政治部記者の読みにはかなわない。連携プレーの大切さをあらためて感じた。

コメ問題を取材していて痛感するのは、身近な商品、食料だけに実に様々な意見、立場があるということだ。「米価は高い」「輸入を自由化す

昨年、政府は三・八%引き下げの方針で、自民党との折衝に臨んだが、徹夜折衝の結果は据え置き。朝刊の締め切り時間寸前まで情報を集め、折衝の行方を予測しようとするが、財政をやくりくりする官庁的発想に毒された(?)側としては、つい「下げ幅△・〇%に圧縮も」と書いてしまいそうなるころ。

そこへ「引き下げと据え置きとは質が違う。自民党は据え置き以外に手を結ばない」という政治部記者の情勢分析が加わらなければ、政治決着当日の朝刊で、とんだ誤報を流す

べきだ」との主張に対しては「コメ消費支出は年間一世帯あたり十万円以下。主食を確保する保険料としては高くない」との反論がある。読者から「米価水準より、農家に対する補助金、優遇税制を問題視すべき」との指摘も受けることがある。まだまだこの問題については百家争鳴の論争が続くことだろう。米価下げの後は、いよいよ市場開放問題がクローズアップされてくる。私もひとりの記者として自問自答を繰り返しながら取材を続けることにしたい。

かしはら ひろし (一九八一年日本経済新聞入社、経済部、横浜支社編集課勤務を経て、八六年三月から経済部、農林水産省担当)



写真 日本経済新聞

光華寮訴訟

ワーキングプレス

部屋の明け渡し訴訟の光華寮裁判が、これほどまで日中間の大きな政治問題に発展すると誰が予想しただろうか。確かに中国と台湾がそれぞれ寮の所有権を主張し、政府の承認問題がからむ前例のない裁判だけに、台湾に軍配があれば中国の反発は当然予想されたが、中国が国家の威信をかけてまで抗議に出るとは思いもよらなかった。「寮は台湾の所有」との判決を出した裁判官も「なぜ、

そこまで問題に？」と首をかしげれば、訴訟の被告になっ
ている寮生自身もいささか戸惑いの表情を隠せない。

二十年に及ぶこの裁判で、中国政府が全面に出てきたのは昨年二月の京都地裁判決後だ。台湾の所有権を明確に認めたのだから反発は当然ともいえるが、この判決は五十七年四月、大阪高裁がこの訴訟は単に私的な紛争と指摘し、中国の所有権を認めた一審の京都地裁判決（五十二年九月）を取り消し、差し戻した時点で予測できた。この時、中国が今ほどの抗議行動を展開した事実はない。

た。昨年二月の京都地裁判決前後で、寮生の取材への対応も変化をみせた。判決前は自分たちが戦後、いかに寮を管理、運営してきたかを強調し、台湾の明け渡し請求がいかに理不尽なものかを話してくれた。ところが判決後は「すべて領事館に任せてある」と個人的な意見は差し控える傾向が目立ち、以後、中国政府の一連のキャンペーンが始まった。

「打てば響く」中での報道

三谷 茂

国際法上の準則に照らすと理になっ
ていない。一方、京都地裁、大阪高裁の判決にしても、それなりに理になっ
ていない。英米法と大陸法との解釈、三権分立の有無などの違いを考慮しても、理論的にどちらが正当かの判断は難しい。ただ、日本のマスコミ報道で気になったのは、中国側に日本の三権分立制度、法制度を理解してもらおうよう努めるべき、との論調が目立ったことだ。京都新聞も社説でこのように趣旨を論じた。中国がよほど日本の制度について無知であるかのような言い方だ。案の定、寮生を支援している京都華僑総会の知人から指摘を受けた。

光華寮問題が、教科書問題、中曾根首相の靖国神社公式参拝、日中間の貿易不均衡など中国の神経を逆なでする動きや傾向の延長線上にあることは推測できる。しかし「なぜ、今、これほどまで」という気持ちはぬぐいきれない。中国は「判決は二つの中国を認めるもので、中日共同声明、平和友好条約に違反する」と言う。この主張は的をはずれていないし、

「日本の社会で三権分立制度の重要なことは中国はよく理解している。理解したうえで二つの中国を認める判決の不当性を指摘している。光華寮問題は司法の問題ではなく行政の問題。日本政府が中国に対してきちんと対応することを求めているのだ。日本こそ中

国をもっと理解すべきでないか」
京都新聞は中国の「光明日報」と記事、記者の交換をしている。四月十二日には三権分立制度について論評するなど、光華寮問題は打てば、響く関係にある。現場としては「うかつなことは書けない」という気持ちがあるのも確か。また寮生たちも地元の人たちで、反応は早い。今後、最高裁がどう判断するか、また日本政府がどう対応するかが注目されるところだが、長年、寮に住む元留学生は「我々が安心して住めるよう、中国と日本政府が話し合いによって解決することを望んでいる」とその気持ちを打ち明けてくれた。



昭和7年頃建築の寮 写真 京都新聞

また、しげる（一九七三年京都新聞入社、官津支局、整理部を経て、八二年から社会部、現在、司法担当）

「松寿園」火災

ワーキングプレス

静かな夜がふけていった。「こんな日は、ビールに限るね」などと言っていた遊軍のさざめきも去り、社会部には、当夜の当番デスクの私と夜勤のメンバー四人。

このところ、土曜日組みの朝刊デスクは、特別なことがない限りヒマだ。週休二日制が定着するにつれ、社会の動きが緩慢になったせいもあるのだろうか、とにかく生きのいいネタにお目にかかることが少なくなってきた。この日も、とりたてて言うべきネタもなく、整理デスクとの間で、「暑さで行くか」と相談がまとまっていた。

遊軍が、列島の最高気温を気象庁に問い合わせ、警視庁からは、この日、日射病にかかり、救急車で運ばれた人十二人という雑報が入ってきていた。十二人の内訳を見ると、散歩中に脱水症状で倒れた老人もいるという。この時期としては、やはり異常な暑さだ。

「それじゃあ、個々のケースをより具体的に検証して」と、サツ回りのK君に、東京消防庁への補足

取材を命じた。十一時四十五分ごろだったろうか。K君が、突然「東村山の老人ホームが火事だそうですよ」と言う。「おい、おい、そりゃあ大変だぜ。とりあえず、一報をつくれ」と言っておいて、二メートルばかり離れた地方部デスクへ走った。

わが社の取材体制では、現場は、地方部八王子支局の管内である。「東村山の老人ホームで火事」と

翌日組み込みから緊急連載

戸田

告げると、地方部デスクは、機敏に動いた。写真部員が飛び出す。地方部のMデスクが「現場に近い所沢支局などからも出てもらったよ」という返事をくれる。

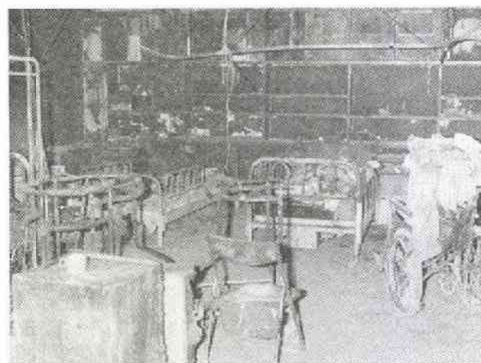
同じころ、警視庁のクラブからも一課担当者を中心に六人が現場へ向かった。「五人不明」の一報を提稿する。硬派の整理デスクが十三版追いかけて出すと言う。しかし、情報は、混乱を極めた。

「二十三人死亡、二十五人不明」と言うかと思えば、「全員救出」とも。そんな中で、一面本記は現場を持つ八王子支局に、社会面は社会部でと決め、ようやく、ホテルニュージャパン以来の大惨事報道の原稿に、一応の形がついたのは、午前一時十分。その後も、犠牲者の数はくるくる変わったが、一時半現在で「死者十三人、行方不明四人」という警視庁情報の数字をたたき込んで、輪転機のスイッチが押されたのだった。

孝

約二時間半の仮眠の後、十七日の取材はスタートした。本記関係は警

視庁クラブ、雑観は地方部という分担である。「出火原因はなにか」「法律に定められた防災体制を持ちながら、なぜ、十七人もの犠牲者が出たのか」——当然のことながら、取材は、この二点に集中した。現場デスクのM君からは、「防災体制がAクラスといっても、実際に機能していなかったんだね」と電話で言ってくる。十七人の人生の軌跡を追っていたサツ回りの



焼けこげたベッドと車イスが無残
写真 読売新聞

とだ、たかし（一九六二年読売新聞入社、長野支局を経て六七年から社会部、現在デスク）

諸君からは、犠牲者がホームに書き残した住所に行ってみると、手掛りのない人が多い、という連絡が入る。これで、松寿園を、最後の生を託す場所と決めていた入園者たちの覚悟がわかる。「よし、緊急の連載をやるう。タイトルは、『焼け落ちた楽園、今、高齢化社会を問う』でいこう」

連載一回目のゲラを待ちながら、都庁キャップのN君が、オニギリをほうばり出した。「きょう、実は、ピクニックへ行く予定だったんですよ。彼もまた、楽園を失った一人だったのである。」

ク ラ ブ ゲ ス ト



J・S・リード シティコープ会長

「MITで冶金工学を、ジェフア
ーソン大学で米国文学を専攻した人
が、どうして銀行の会長になったの
でしょうか。それも私どもの関心の
一つです」と司会者(笑)。

五月十九日の取締役会で、累積債
務国への融資に対し三十億ドルの貸
し倒れ引当金の積み増しを決めた。
ニューヨーク・タイムズは、特集記
事で「大胆不敵な指導者」と賛え、
社説でもこれを歓迎した。ウォール
街もリード人気に沸いた。

IMFや世銀が今後とも途上国を
支持し続けると同時に、民間銀行も
一九九〇年まで資金を提供してい
なければならぬ現状で、「我々は
銀行の体質を強化しなければなら
なかった」「ペーパープランを支持し、
世界経済の拡大のためにも途上国へ
ニューマネーを提供していく」と。
ただし、日本の銀行の場合は含み資産
も多く本来体質が強いので、同種の

措置をとる必要はないだろう、とも言う。

また、日米の貿易不均衡調整のため、
「今後四年くらいはドルが継続的に弱く
なっていくのではないか」と述べ、その
過程で韓国、台湾などを含めた通貨調整
が進展する、との見通しも。

わが国での支店の数を五〇とか一〇〇
に拡大したいとし、邦銀との合併・買収
にも意欲のあるところを示した。

若くて(四八歳)確信に満ちさつそうと
したリーダーぶりに、「ああいう人がい
るうちは、米国経済も大丈夫だよ」との
感想が、終了後、ラウンジでの会員の
採点の中から聞こえてきた。(六月五
日(金) 昼食会 司会 広瀬 一郎委員 通訳 佐藤
知子 出席 一四九人)

G・R・パッカード ジョーンズ・ホプキ
ンス大学ライシャワーセンター所長



通算で六年余り日
本に住んだ経験があ
る。東大の研究員、
そしてライシャワー
大使の特別アシスタ
ントも務めた。ご本
人は「カバン持ちで
した」と言う。その後、ニューズウイ
ークなどで活躍後、大学へ。日本語はた
ん能なのだが、この日は「自国の言葉でさ
え正しく意味を伝えるのはむずかしいの
で、へたな英語で」と通訳を介す。これ

も、元のボスのライシャワーさんの教え

とか。日米双方が不安に感じている分野
への相互乗り入れ論(日本は米国の
農業へ、米国は日本のハイテクへ)は、
先月末に届けた記録版の通り。(六月九日
(水) 研究会 司会 阿部義正委員 通訳 西村好
美 出席 六九人)

加藤 六月 農林水産相

政策通の勉強家だが、ガードが固くな
かなかニューズクを出さないことで有
名な人らしい。そこで、山岸、武藤の両
企画委員が相談して、急拠、カード方式
で質問を集め、ポイントを整理して、武
藤委員から集中質問することを決めた。

これが功を奉し、翌日の各紙朝刊には
「農水相 消費者米価下げを示唆」の大
文字が躍った。

二種兼業農家が採算があわなくなり、
農地を放出する程度まで、生産者米価を
引き下げる用意があるのか——の質問へ
の答弁で大臣は次のように発言した。
「生産者米価を決める時には、消費者米
価も念頭において考えなくてはならな



い、という問題はある。普通は年末決定

なので、私以外の人が決めることになる
のでしようが、後任に選択の幅をもたせ
る努力をしなくちゃならないのではない
か。それで、任期中にも消費者米価を下
げたいとの願望があるのではないか——
と二の矢。これには、去年から農民に抱
かした自主保管米四〇万トンの措置が絡
むので容易でないとしながらも、「農政
に国民の理解と納得をとらう私の立場か
ら言えば、出ていく方向が分かるだろう
が、いまからは言えない。いろいろ考え
ているという程度の答えにしてほしい」
と。(六月二六日(火) 昼食会 司会 山岸二平
委員 出席 八七人)

近藤 鉄雄 経企庁長官

細谷新企画委員長の初司会だった。そ
のこともあるのか、長官は「こういふ会
合にご招待いただきと近藤鉄雄、いよいよ
よ政治家になってきたナリ」と。

六月六日(十四日まで)訪米、緊急経済
対策を説明してきた。二五年前、IMF
日本代表の秘書役として住んだワシント



ク ラ ブ ゲ ス ト

ンのアパートを、夫人とともに訪れた感慨から話し出した。「素晴らしいところに住んでいたんだナ。あれから二四年間、何をやってきたのか。いまは九段の議員宿舎、生活環境は下がりっぱなしではないか(笑)。国民生活をギリギリにつめてモノをつくり世界へ売りまくってきたが、今は生活優先へコースを切りかえなければとの長官の主張。「おおいに結構」と受けとめるべきか、「ちょっと無責任」と考えるべきか。

【六月一九日(金) 昼食会 司会 細谷洋一 委員長 出席 四六人】

吉富 勝 経企庁経済研究所長



「米国の財政のベルトを締めずドル安が一層進めば、金融不況の可能性もある」と。日独が内需拡大で高成長策をとれば、米国の対外赤字は世界経済の拡大均衡のもとで解消していくとするベーカー路線を、非現実的とデータで示す。米国が内需を二%減らす場合、GNPへの影響はマイナス一%で、世界への不況効果はその半分、その程度なら日独の責任ある財政政策で相殺可能、と。

「米国の財政再建からくるリセッションを恐れすぎではないけない」【六月二三日(火) 研究会 司会 平田真己委員 出席 七一人】

神谷 健一 全銀協会長



この四月に金銀協会長に。世界一の債権国のパンカーズの中のパンカーである。三井銀行社長。

三井両替店に始まる自行の国際業務の歴史をPRした後、サミット後の為替状況、金融摩擦、邦銀の海外でのオーバードレゼンス、累積債務問題と、タテ板に水の解説と見解表明。明朗で率直、自信に満ちていて話上手である。

質疑応答の一部を紹介する。非沢会員「恐慌論をどう思うか?」「レーガン政権になって、ああいう運営をするから巨大な双子の赤字を生んだが、大変なポテンシャルを持ち、いざとなれば団結力のある国なので、経済政策のギアを変えて、軍事費を圧縮し増税でもすれば、相当に変わると思う」。大谷会員「銀行家は経済人の中でも慎重な方々と思っていたが、素人でも危いと分かるブラジル、ア

ルゼンチンなどへ貸し込み、最近は大損するのがはっきりしている米国債を買う。銀行家、みんなで貸せば恐くない?と聞いているのだろうか。むやみに貸したことが、途上国の経済運営を安易にしたし、米国債も大量に買わなければ、財政再建にもっと早く注意を向けたかもしれない。そして、今後は株式をドンドンやりたいと言う。金融家の反省をどう考えているのだろうか? 「お言葉でありがたく受けとめ、慎重な銀行経営に努めますので、ひとつおゆるしを」(笑)。

これを受けて、司会者も「銀行家は慎重で口が重いかと思ったら、大変にフランクにお話しいただきありがとうございます」と幕。【六月二四日(水) 昼食会 司会 広瀬一郎委員 出席 七五人】

W・ヤルゼルスキ ポーランド国家評議会議長

例のサンダラスで入場した。食後、用意したスピーチ原稿を読む際、普通のメカネにとりかえた。表情が多少やわらかくなったが、一度も笑うことはなかった。

スピーチでは、ポーランドの経済改革の進展に自信を示し、東西の緊張緩和に向けての外交努力を説明した。

経済の能率強化に務めた結果、ようやく現在、危機前と同じ生産レベルに戻り、労働効率は二五%向上したと言



う。そして、次のステップとしては①経済計算原理の導入、②競争原理と市場機能の利用、③中央集権的管理体制の見直し——などを内容とした改革を検討中であるとす。その中で日本との経済、技術協力も考えているようだ。

使用言語がポーランド語と日本語だったので、通訳が気がかりだった。それで、プレス担当のポジニアツク一等書記官に、日英のスピーチテキストの準備を要請していた。当日朝、三時過ぎまでかかって、ポーランド側の公式通訳や留学生四人で日本文を書きあげ、午前十一時には英文とも各二〇〇部ずつをクラブへ届けた。邦訳は二、三のミスはあったものの文も字(手書きコピー)もなかなかだった。質疑応答での通訳が十分でなかっただけに、この努力はありがたかった。なお出席者の数では、人なつっこい笑いがいっぱいだった六年前のワレサ会見が二七八人で上だった。【六月三〇日(火) 昼食会 司会 新井明理理事長 通訳 R・フルチャ 出席 二〇九人】

スタジオ訪問

フジテレビ

「モーニングコール」

早朝6時 海外情報いち早く

裏側の現に動いている海外情報に重点を置き、山川さんのキャラクターを活かして、むずかしいニュースを分かりやすく面白く解説する番組にしたい」と吉田寛プロデューサーは語る。円高や貿易摩擦などで、仕事の前に、海外の動きを知りたいというビジネスマンが増加、外国ニュースへの需要は急速に増えている。

同番組には、「ワールドトップニュース」(世界の主要紙のトップ記事を紹介)、「最新ワールド」(海外のホットな話題を最新のビデオで紹介)、「ニューヨークの円相場」などのコーナーがあり、特派員経験(英国六年、米国七年)豊かな山川さんが解説しコメントを加える。

「こんなに自由にのびのびと語らせてくれる番組はないでしょうね」と山川さん。同番組は、構成がゆったりしている。ニュースの項目の間に、初めから「アップキック」を作っておくのだ。もちろん、山川さんに自由にコメントしてもらいたいのだ。

このほか、「業界コール」というユニークなコーナーがある。各業界の専門紙を一日一紙とりあげて紹介、記事からその業界の動向、ひいては日本の社会、経済の現状を探ろうというものだ。スタジオオ内のセットには、「温泉新聞」「かまぼ

こ新聞」「ガスライタータイムス」「住職」「神社新報」等々、題号だけでもニュースになりそうな新聞がズラッと並んでいる。この日は「中央金物新聞」が紹介された。「どの業界紙をみても、円高や輸出入問題など、日本の国際化を必ず反映していますね」と吉田さん。

このコーナーを担当しているのが川端健嗣アナウンサー。中村奈緒美アナウンサーと二人で、山川さんをサポートしている。川端さんは、旧「モーニング」からの続投だ。

このような早朝のナマ番組、しかも報道番組をつくるためには、スタッフの勤務体制が重要なポイントとなる。同番組の専任スタッフは十五人(他に外部の技術要員がいる)。泊まり番デスク一人に外信などの現場記者も加わり、翌朝に備える。そして、一般のスタッフも午前三時半には出勤する。

「カコクですよ」と言う山川さんだが、実はいつも一番乗りなのだそう。山川さんは毎晩、自宅にファックスで翌朝放送予定のニュース項目を送ってもらっている。そして出勤後、新聞の早版に目を通し、不明な点があれば、特派員に電話を入れることもある。「起きてから四時間半で、僕の一日の全てが終わります。これまではウォーミングアップの時間があり、本番組に焦点を合わせてピーク

へもっていけばよかった。早朝の番組はそれがむずかしく、非常に大変です」。川端さんもこう言って笑う。実は、彼は目下、フジテレビの早朝番組担当の男性アナウンサーの最長不倒記録を更新中である。「早朝の番組経験者の話を聞くと、番組を降りたとたんに、頭のモヤやカスミが消えるんだそうです。やはりいまの我々の毎日は、人間の生理に逆らったことをしているんですよ」。

ところが、「モーニングコール」をはじめ各局とも、午前六時台の視聴率は上がる傾向にあるという。制作スタッフの「激務」に支えられ、今後も早朝番組のナマ化、報道化はなお一層強まりそう。地球は二十四時間、動いているんです。金融と情報は、二十四時間体制になつていくと思います」と山川さんは語る。(長谷川和子)



「ナイターも7、8回までで、結果が出るころはいつも布団の中で」山川キャスター、中村、川端アナウンサー(左から)

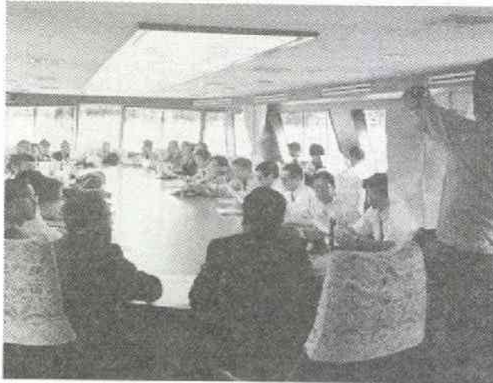
東京港見学会

東京都をはじめ国土庁、建設庁、通産省など、官民あわせて二十以上の開発構想が発表され、注目を集めている東京港を見学した。

六月八日午後一時三〇分「新東京丸」(一九七トン)に参加者五十人が乗り込み竹芝を出航。よく晴れたものの、風が強く波も高く、予定コースを一部変更しなければならなかった。

都港湾局総合計画課の嬉野課長補佐ら、港湾施設の機能と将来計画についての解説を聞きながら、約一時間で港内をほぼひと回りした。

竹芝に戻った後船内で、臨海部副都心

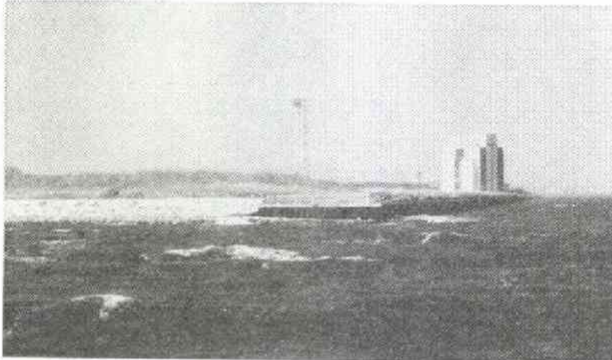


50人を収容できる「新東京丸」内の会議室でブリーフィング

計画を担当する企画審議室の吉岡輝夫参事から、都が進めている「東京デレポト計画」の概要説明を受けた。

計画では、総面積四四〇ヘクタール(新宿副都心の約四・五倍)に、インテリジェントビルやマンション群を建設、そこに四万四千人が住み、十一万五千人が働く。利用する埋立地は、昭和三十年から五十年にかけて造成した13号、10号と有明地区。すでに地盤は固まりつつあるが、新しい部分は今年も年間三十センチずつ沈下しているという。開発スケールは大きい、ここでも地価高騰の波をかぶり、都心と結ぶ交通網整備が問題に。

計画では、総面積四四〇ヘクタール(新宿副都心の約四・五倍)に、インテリジェントビルやマンション群を建設、そこに四万四千人が住み、十一万五千人が働く。利用する埋立地は、昭和三十年から五十年にかけて造成した13号、10号と有明地区。すでに地盤は固まりつつあるが、新しい部分は今年も年間三十センチずつ沈下しているという。開発スケールは大きい、ここでも地価高騰の波をかぶり、都心と結ぶ交通網整備が問題に。



13号埋立地の最先端 右の建物は海底トンネル用の換気設備

◇番外料理の会 夏向きのアラカルトで

四月に第一回の「料理の会」をご案内したところ、五〇人余りの申し込みがありました。食があるき番組の人氣と男子厨房に入るの時代を背景にしたものかと、実はビックリ。しかし、キッチンが狭いため、三〇人余りの方々にはお断りをしてしまいました。

これを聞いた中村立夫シェフは、「その方々のために特別にやりましょう」と、番外が六月二十七日(土)午後行われました。メニューは冷製パンブキンスープとフランクフルト・サワークラウト。



タマネギをバターで炒め、カボチャを加えて、チキンブイヨンでポイル。それをミキサーにかければスープはあがり。味のポイントはブイヨンのよしあしと最近のカボチャは甘みが少ないので砂糖の加減。塩づけしたキャベツを使うサワークラウトは、ペーコンの味との組み合わせが決め手です。

第39回施設運営委員会(6・12 第2会議室)

六十一年度の会議室等の利用状況について事務局から報告、意見を交換した。

出席 犬養委員長。後藤、佐川、根津、和田、小松原、甲斐原、野田の各委員。

第82回会報委員会(6・15 第2会議室)

六月号について意見交換の後、七月号の編集について協議した。

出席 深川委員長。林、三好、松井、東郷の各委員。

第118回会員資格委員会(6・16 第2会議室)

七月一日付の会員入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺委員長。中川、小池、播谷、樋口、玉井、青木、亀垣、埜邑、長竹の各委員。

第146回企画委員会(6・18 大会議室)

司会をした委員からクラブ行事の報告があった。また、自民党総裁候補の昼食会と、土地問題についての研究会を行うよう準備することにした。

出席 細谷委員長。浅井、阿部、山岸、友田、広瀬、井上、石丸、高橋、久木、高阪、武藤、河野、林、平田、堤、有馬、ヒルンチャーの各委員。

◇個人D会員

プロフィール

六月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助
会員の方々です。

○囲碁の会

六月二十日は夏季大会。スイス方式による全順位は次の通り。

①近藤敬三段②森本孝六段③新井明四段④山崎政人四段⑤西崎哲郎五段⑥浅野道彦四段⑦竹内善昭初段⑧後藤光祥二級⑨村上孝止六段⑩本田路威二級⑪大日向一郎四段⑫内川芳美二段⑬高井明昌四段⑭細金正人初段⑮赤井良平五段⑯橋本正邦五段⑰西山武典二段⑱堀川敏雄五段⑲広田耕司初段⑳白井敏之四段㉑小野盛四郎初段㉒出田裕六段㉓川本和孝三段㉔石崎信治六段。(番外・馬淵良俊二段、斎藤吉史三段)。

七位までが入賞。うち三位までは副賞として新井会長からシーパスリーガル大瓶が贈られた。優勝の近藤三段は四段に昇段。



次回は七月二十五日(土)午後一時から。初めての初めの方の参加、大歓迎です。事務局までご連絡を。

紹介合会

1日▽第十回アセアン記者研修計画参加者歓迎レセプション(協会 宝子山幸充会員)▽朝鮮半島統一問題に関する国際学術シンポジウム—金学俊ソウル大学教授、金達中延世大学教授、小此木政夫慶応大教授、安江良介岩波書店総編集長、饗庭孝典NHK解説委員、今津弘朝日調査研究室顧問他(東亜日報 金琉照会員) 2日▽ブリテイッシュ・カレドニア航空 東京—ロンドン直行便就航記念記者会見(国際PR 後藤忠良会員)▽斎藤鎮男さんの叙勲を祝う会(小林庄一会員) 3日▽金蔵さん(元毎日政治部長、現安倍晋太郎自民党総務会長秘書)を励ます会(東京 佐藤雄一会員) 4日▽民報協第五十八回総会・懇親会(TBS 中村欣資会員) 5日▽第二回自治体広報研究会(NHK 石田端会員)▽地方新聞広告研究会ゼミナール懇親会(神戸 都築信会員)▽在京九社編集局長会(協会 田村進会員) 6日▽青森県ジャーナリストの会(陸奥 川越淳弘会員) 8日▽岡崎嘉平太先生の九十歳を祝う会(池貝ゴス 渡辺良雄会

員) 9日▽東京写真記者協会加盟社部長会(共同 柳沢良雄会員) 10日▽吉野正弘さんの日本記者クラブ賞受賞を祝う会(毎日 歌川令三会員) 11日▽六十二年度NRN(ネットワーク・ラジオニュース)総会—ゲスト 土井たか子社会党委員長(文化放 柴正明会員)▽「BIG WAVE」発刊パーティー—岡山、香川両県の放送五局が、エリアPRの資料を共同作成(山陽放 川崎裕会員) 12日▽川中子真君(元サンケイ論説委員、近畿大学教授)を励ます会(サンケイ 北詰洋一会員)▽在京社会部長と警察庁幹部との懇談会(協会 田村進会員)▽東北新聞連盟総会—東奥、秋田魁、岩手、山形、河北、福島民報、福島民友の七社(福島民友 阿部浩会員) 15日▽堀ペリグ会長をお祝いする会—同氏のシंगाポール大使時代の各社特派員の集い(毎日 高木暢之会員) 16日▽アルスター会—ハンブルク駐在の特派員経験者、商社員の集い(時事 佐々木秀会員) 17日▽日本ABC協会会員懇親パーティー(井上済会員)▽第五十八回定例会員総会(協会 山田年栄会員) 18日▽「放送文化基金賞」贈賞式—「NHK特集 世界のなかの日本 経済大国の試練—日本のカネ

は世界で何をしているか」「NHK特集 のぞみ五歳—手さぐりの子育て日記」「ドキユメンタリー「家」(関西テレビ)、「再会—平壤への遠い道」(信越放送)、「報道特集 核と過疎—幌延町の選択」(北海道放送)、久米宏テレビ朝日「ニュースステーション」キャスター、「モーニングモーション」スタッフ(九州朝日放送) 他が受賞(川平朝清会員) 19日▽木村忠さんの出発を祝う会(文化放 峰岸慎一会員)▽橋善守氏(毎日OB)の叙勲を祝う会(枝松茂之会員) 23日▽日本外交協会研究会—講師・渡辺幸治外務省経済局長(池浦泰宏会員) 24日▽藤岡幹恭(元毎日エコノミスト編集長)・増田俊二(東京編集委員) 共著「日本のコメと農業をどう変えるか」出版記念会(東京 石橋俊彦会員) 25日▽JNN報道部長会(TBS 志甫博会員) 26日▽航空ジャーナリスト協会総会・懇親会(富重静雄会員) 29日▽福井惇氏「一九七〇年の狂気」出版記念会(サンケイ 山中末孝会員)▽エネルギーを考える会(読売 中村政雄会員)

(会員がクラブ施設を利用して行った主な会合です。六月の総回数は一四一回でした)



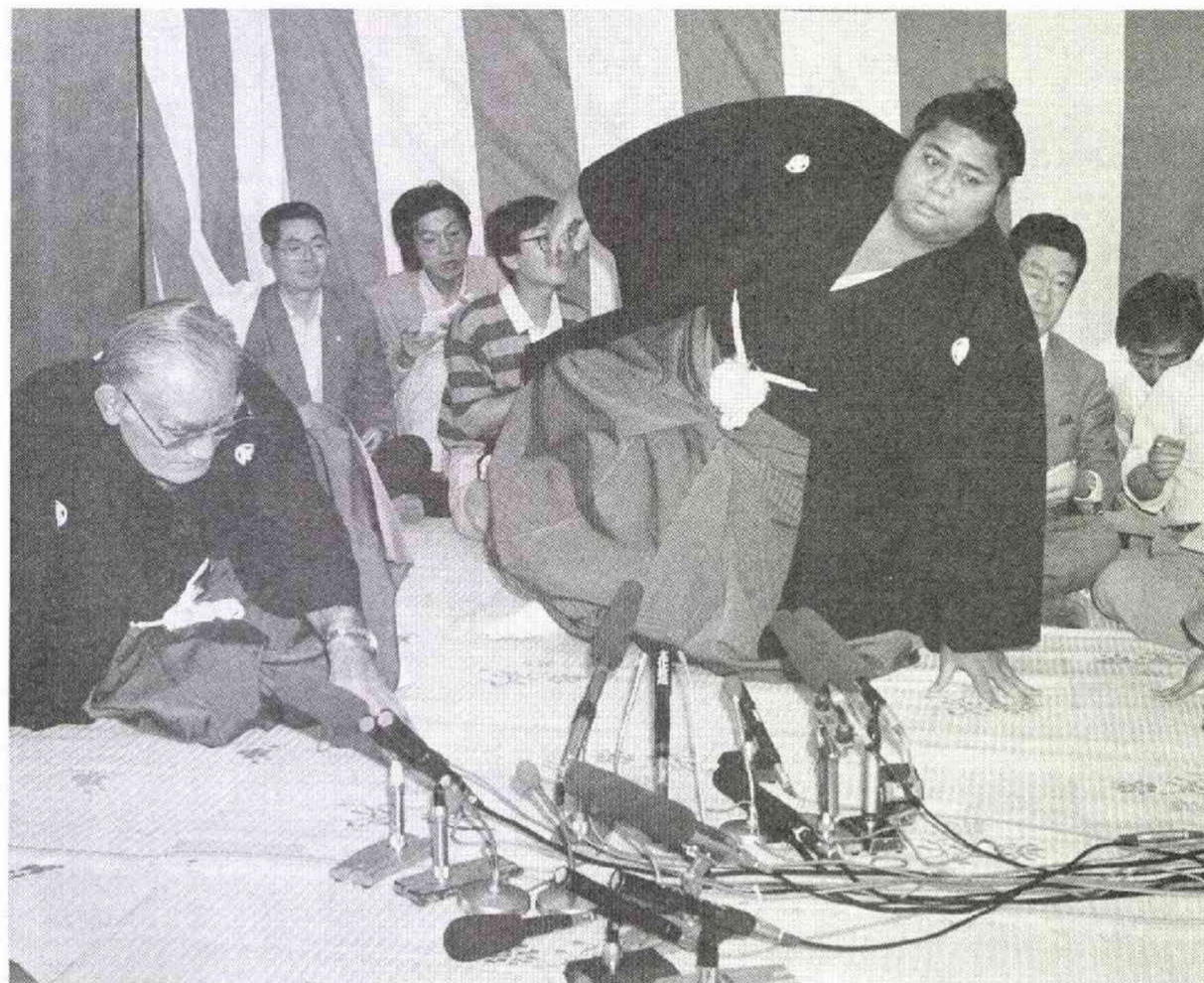
▼成田—ニューヨーク間、直行便で十二時間二十五分。総勢六十人の一行がタイムズ近くのヒルトンに旅装を解いたのが五月三十日。ニューヨーク、ワシントン、フロリダのオランダとまわって、ラスベガスの米新聞発行者協会主催技術会議、機材展へ。ここで財布の中味を気にしながら四泊五日。ホノルル経由で成田へ、ちょうど二週間の旅でした。広告を全米の新聞社へ送るのに人工衛星が使われていること、電算機のなかで組まれた新聞ページが直接印刷原版で出てくることなどを現場で確かめてきました。毎年実施しているこのコンプト視察旅行も今年で十二回目。総行程三十五万キロを越えました。(新聞製作技術懇話会 安養寺敏郎)

▼この七月中旬から、イギリスのBBC、日本語部へ出向することになりました。ビッグ・ベンの鐘の音で始まるBBCの日本語放送は、毎日朝七時と夜八時にキャッチすることが出来ます。シンガポールに中継局があるので、音も大変クリアです。特派員とはまた一味違った視点でのレポートをお届けしたいと思っています。お手元に短波受信機を一台、ぜひどうぞ!

(東京放送 高階 玲子)

写真部

写真 森下東樹 (朝日新聞社 写真部)



「大関小錦」の教訓

この人が土俵に上がると場内のどよめきが津波のように高まる。勝っても負けても大喚声だ。プロ野球はホーナー人気で持っているといわれるが、その伝でいうなら、相撲は五年前から小錦人気で持っている。外人を横綱にしたくないなどというケチな見の関係者がいるとしたら、とんでもない心得違いである。

人間離れた巨体でひたすら相手を押し潰そうかという取り口は、ケタ外れで単純明快だ。格闘技の原点である。小男が大男を引っくり返すをもって本領としてきた角界の技術体系も、同時に押し潰されてしまった。かつてヘーシンクが日本柔道を変え、大男時代の幕を開けたように。

総身に知恵が回りかねるのと違い、小錦は頭のいい青年だと相撲記者はいう。弁護士になりたかったが、家が貧しいので力士になった。カセットテープでたちまち日本語をマスターし、生活習慣のギャップもすんなりとび越えた。

近ごろの貿易摩擦で、アメリカ企業は口を開けば日本市場の土俵が狭いの、商慣習が閉鎖的だの、差別的だのと文句を並べる割に、溶け込む努力をしない。ハワイ生まれの同国人の、研究熱心がもたらしたこの成功を真似することである。

(林 芳典)

小錦会見 シドクスターストップ

六月十七日(水) 午後に予定していた新大関小錦関の会見はゲストの都合で急遽中止になりました。お申し込みいただいた六〇人余りの方々には、電話で「中止」をお知らせし、各社へも共同配信で流していただきましたが、当日、中止を知らずに都合をつけて急におみえの方も数人いらっしゃいました。おわびいたします。大関は六月に入ってハワイへ里帰りしていましたが、会見前日の十六日午後には帰国の予定でした。しかし、足の調子が悪く、医者から名古屋場所入りギリギリまで同地で治療するよう勧められ、親方とも相談した上で入院決定、従ってクラブでの会見は残念ながら中止となりました。中止の決定がギリギリになったため、ご迷惑をかけてしまいました。

頭の回転のはやい、小錦関との一問一答に関心をよせていた会員も多いので、まずは新大関の名古屋場所での健闘を祈り、あらためて機会をみてクラブゲストとしてお招きしたいと考えております。

会員の著書

(ご惠贈いただきました。クラブラウンジの書棚に置いてあります。貸し出しもいたします)

永田町の上流家族

(かんき出版 千五百円)

牧 太郎 (毎日新聞政治部)

円高・空洞化 国際協調への戦略 (東洋経済 千三百円)

鈴木 幸夫 (テレビ東京常務取締役解説委員長)

21世紀への直言 「地球人に」とどけ 尚志のこ

ころ 二高尚志同窓会記念誌編集委員会編 (講

談社 千五百円)

江尻 進 (日本新聞協会出身)

山形新聞から さくらんぼ

今年も、山形新聞から季節の便り、極上のさくらんぼがクラブに届きました。早速、いつものようにラウンジで、会員の皆さまに賞味していただきました。

梅雨あけから夏への期待を届ける「可憐な使者」ですが、どうして今年は連日水不足ニュースの洪水。しかし、さくらんぼの方は実割れもなく甘さも十分で大豊作だったそうです。米国産との競合で、ますます季節の味にみぎがきがかかったのかもしれない。

防災訓練——会見中の出火を想定 VIPを迎えての会見中の火災を想定した、クラブ、プレスセンター、アラスカの共同訓練が、六月二十六日午後行われました。この種の訓練を年に一度必ず行っていますので、会員の皆さまには方が一の場合、あわてず事務局の指示、先導に従うようご協力を。

寄贈書

昭和六十一年度 日本新聞協会の活動 日本新聞協会
科学と人間の調和をもとめて 日本コンベンションサービス

展覧会の招待券 朝日新聞社から「山口華楊回顧展」
「唐招提寺展」、日本経済新聞社から「松田権六展」
「カンディンスキー展」、平野光男会員(西武百貨店)から「松田権六展」
「世界の絵本原画展」
「もの派とポストもの派」の招待券をご惠贈いただきました。お礼申しあげます。

新しい会員名簿をつくります

八月一日現在で、新しい会員名簿を作成します。

個人D会員、特別賛助会員の方々に役職、住所、連絡先などの変更がありましたら、クラブ事務局の長谷川、河野(五〇三) 二七二二までお知らせ願います。

七月一日現在の会員状況 法人会員 一四四社 基本会員 六一五人 個人会員 一、三六九人 法人・個人賛助会員 七六社 二三五人 特別賛助会員 七三人 名誉会員 一六人 計 二二〇社 二、三〇八人

七月の行事 (6日現在)

- 7日(火) 午後2時~3時30分 「日米関係」シリーズ(VI) 大前研一氏
- 10日(金) 午後1時30分 東京港見学会
午後2時30分~3時30分 ジョン・F・エイカーズIBM会長記者会見
- 14日(火) 午後2時15分~3時15分 モハメド・K・ジュネジョ パキスタン首相会見
- 17日(金) 午後2時~3時30分 「日米関係」シリーズ(VII) 山本正日本国際交流センター理事長

会報委員長 深川 誠

委員 林 利隆 三好崇一 松井 章 東郷茂彦
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三-二七二二